

『吾輩は猫である』の表現

はじめに

作者は「吾輩は猫である」(以下「猫」と略称する)の冒頭で、主人公に「吾輩は猫である」と述べさせておいて、すぐさま「名前はまだ無い」と続けさせる。

正面切つて名乗つておいて、即座に「名前はまだ無い」と弱気に述べるとは、一体どうしたことなのだろう。弱気なのではなくここに作者の、新しい作品に対する並々ならぬ意気込みが込められているように思われる。従来の、ありきたりの表現や構想に基づく小説ではなく、新しいタイプの作品を作り出そうとする、作者の強い意欲の表れではなからうか。

これまでのありきたりの表現を捨て去って、新しい表現を生み出そうとする作者の意欲が、作品全体を否定的な表現で染め上げることになつたのではなからうか。

本稿では、この作品の否定的な表現に注目して、「無―」や「不―」を冠した表現を取り上げ、そこからこの作品の特色をえぐり出そうとするものである。

なおテクニストとしては「漱石全集 第一巻」(一九九三年

岩波書店)を用いた。

鈴木英夫

まず「不―」を冠した漢字語から見て行く。「漢語」ではなく「漢字語」としたのは、「不―」を冠した語には「不似合」のように、漢語ではない語もあるからである。つまり「漢字語」とは漢字で表記された語という意味である。

「不―」を冠した漢字語でまず注目されるのは「不人情」である。主人公の猫である「我輩」が尊敬する猫の「白君」(白^{びやく})は、「人間程不人情なものはない」と言う。「不人情」とは「人としての思いやりが無い」といった気持ちを表した語であろう。人間に豊かにあるべきはずの「人情」が、逆に人間には少ないことへの驚きと不満を述べた表現である。

「不人情」というのは、余り強い非難ではないが、「不人情」な態度や行為を回避するということは、この時代の人間関係を円滑にするためには、重要な配慮であったといえる。「不人情」という表現は、作品中に多く出てくる。

作品中には「冷酷不人情な文明」(104)という表現も見られ

る。現代の我々なら、「人間性に欠けた文明」とでも表現するところであろうか。「不人情」という語は、ある人間がまわりの人間に対して、やさしさを欠けた態度で接することでも言うことが出来よう。

ひとに冷遇された時、「あなたは不人情だ」と非難すること
は、この時代にはかなり日常的に行われたものと考えられる。

「我輩」（猫）は、御三の不意からしめ出しを食って、「野良犬の襲撃を蒙（うむ）り漸く（よ）の事で物置の家根へかけ上つて、終夜顛えつゝけた事さえある。これは「御三の不人情から胚胎した不都合である。」（411）と述べている。

人間同士の関係についても、当然「不人情」は使われる。披露会に出てくれと言われた主人が「いやだ」と答えると、三平君に

○「少し不人情のこたるな」（561）

と言われる。それに対して主人は

○「不人情ぢやないが、おれは出ないよ」（561）

と答える。結婚披露宴の出席を断った時も「不人情」と言われるのである。

「不人情」か否かということは、当時の社会の人間評価の基準としては、かなり重要なものだったのである。「冷酷不人情な文明」（164）と言う評価は、現在の我々にはピンと来ない表現である。我々なら「人間性に欠けた文明」とでもいうところであろうか。「不人情」という語は、ある人間がまわりの人間に対して、その態度や行為がやさしさをもっているとは思われない場合の評価である。ただ、「不人情」という語は余り強い

非難を表わす語ではない。

主人公の猫は、この家に住み込んだ當時を思い出してこう述べている。

○吾輩は此家へ住み込んだ當時は主人以外のものには甚だ不

人望であつた。（6）

「不人望」という語は、今日ではほとんど使われていない。「人望」という語は平安時代から使われていたが、「不」を冠して使うようになったのは、明治時代になつてからである。當時は漢語が盛んに用いられ、いわば漢語全盛の時代ともいふべき時であつた。二字漢語が新しく造り出され、新聞でも、盛んに使われた。それらの二字漢語、あるいは二字漢字語に「不」を冠して使うことも多く見られるようになった。「不」を冠した例としては「不相当」とか「不相応」といった語も後述のように明治時代には盛んに用いられた。

「不愉快」は一般に話題となつてゐる主体の感情に関わる。

○僕は不愉快で、肝癪が起つて堪らん。（354）

それほど強くない感情であれば「不満足」という語で表わされる。

○西洋の文明は積極的、進取的かも知れないがつまり不満足

で一生をくらす人の作つた文明さ。（356）

ある人間が、本来の望みになつた状態に達しない時には「不本意」な思いを抱く。あるいは「本意ではない」ということになる。次の例は、風呂場に積み重ねられた「小桶」の心情を擬人的に表したものである。

○丸いものが三角に積まれるのは不本意千万だらうと（284）

「不本意」ほど当事者の意図が前面に出されない時は「不都合」が使われる。具合の悪い事態が当事者に直接関わりのない場合である。

たとえば女中の思いやりがうすく、猫が御三に「しめ出しを食って」野良犬に襲われ、危うく「物置の家根へかけ上って、終夜頭へつづけた」のは「御三の不人情から胚胎した不都合である。」(41)「不用意なふるまいは、往々にして望ましくない事態を生み出すものである。

○「不用意の際に人の懐中を抜くのがスリで、不用意の際に人の胸中を釣るのが探偵だ。(52)

「不信用」は明治期には余り使われない語である。「信用」という語は十世紀ごろから見られるが、今日のように人を信用するというような使い方は江戸期に入ってからである。まして「不」を冠した「不信用」は江戸期の終りごろから使われるようになった語である。二字漢字語に「不」を冠して使うのが普通になったのは、明治期に入ってからである。

○肺の所に胃が陣取つて、和唐内が清和源氏になつて、民さんが不信用でもよからう。(298)

「吾輩の主人は毎朝風呂場で含嗽をやる時、楊枝で咽喉をつ、突ひて妙な声を無遠慮に出す。」そのため眉をひそめる人もいて、「毎朝不作法な声を出す人かえ」(62)と言われる。「御維新前は中間でも草履取りでも相応の作法は心得」ていたのにと非難されるのである。

人は相応の立居振舞をすべきであるというのが、当時の社会では常識であつた。時にはその範囲を逸脱することも必要で

あつた。

○真宗では仏壇に身分不相応な金をかけるのが古例である。(154)

「相応」に対して「不相応」があるように、「相当」に対して「不相当」がある。それらはどのように関連しているのだろうか。

相応—不相応
相当—不相当

○御維新前は中間でも草履取りでも相応の作法は心得たもので(62)

○相当の教育のあるものにも似合はん所作ですな。(150)

○彼等は不相当に多量の滋味を貪ると同時に(58)

○仏壇に身分不相応な金をかけるのが古例である。(154)

へボンの和英語林集成には、

soo、サウオウ、相応、suitable, fitting, becoming

so-to、サウタウ、相当、suitable, proper, fitting,

becoming

はあるが、「不」がつく場合は

fu-soo、不相応、unsuitable

しか採録されていない。語史的には、「不相応」が室町期から使われているのに対し、「不相当」は江戸期になってから使用されたことによるものといえる。「不相応」は日葡辞書にも見られるが、「不相当」は江戸後期にならないと文献には現れない。

「猫」では、余り新しすぎる漢語は避けて、同義の漢語につ

いては、より親しみやすい漢語、早くから使われている漢語を採択して用いたのではなからうか。

次のような、特異な語も見られる。

○かくの如く身分に不似合なる鼻の持主の生んだ子には、其鼻にも何か異状がある事と察せられます。(137~138)

○僕が不承知だ、(179)

○サントブーヴは……(バリエ) 巴里大学で講義をした時は非常に不評判で(180)

漢語以外の語に「不」を冠した例もある。

○私や此年になる迄人のうちへ行つて、あんな不取扱(ふとりあつかひ)を受けた事はありません(145)

「不本意」という語は、余り使われない。「本意」という表現は字津保物語にも見られるが、「不」を冠して使うのは、明治期以後である。

「合理」の否定的な表現としては、「猫」では

○此不合理極まる礼服を着て……(287)

とあるように、「不合理」が使われている。明治期では「合理」の否定的な語としては、「非合理」も使われたが、「猫」にあるように「不合理」の方が一般的であった。「非」を冠するか「不」を冠するかは、あくまでも習慣的なものであったようである。

二

次に「無」を冠した語について考えてみる。「無」を冠した語は、「不」を冠した語よりも少ない。

まず「無」に二字漢字語を付けた例からみてみよう。多いのは「無」に「遠慮」を付けた例である。

○初春の長閑な空気を無遠慮に震動させて(45)

○吾輩の主人は……含嗽をやる時、楊枝で咽喉をつ、突ひて妙な声を無遠慮に出す癖がある。(62)

○迷亭が鼻々と無遠慮に云ふのを聞くたんびに(175)

○猿股も羽織も乃至袴も悉く棚の上に置いて、無遠慮にも本来の狂態を衆目環視の裡に露出して(289)

その他、次のような例がある。

○又心付くも無頓着なる如く大きな躰(しんぎ)をして長々と体を横へて眠つて居る。(12)

○主人は金田事件杯には無頓着である。(132)

○「夫からどうしました」と主人は無頓着に聞く(48)

○無頓着なる主人は存外平氣に構へて(311)

○あの毎朝無作法な声を出す人かえ(62)

○無作法にも吾輩の襟髪を掴んで宙へ釣るす。(92)

○「そりや本ものかい」と主人は無作法な質問をかける。(160)

「無意味」という語が使われてる表現は、2例しかないが、これも分りにくい。

○只人を威圧し様と、二階作りが無意味に突つ立つて居る外に何等の能もない構造であつた。(125)

○かゝる無意味な面構を有す可き宿命を帯びて明治の昭代に生れて来たのは誰だろ。(149)

「無意味な面構」というのは、何とも分りにくい表現である。どんな顔立ちを考えたのであろうか。平凡すぎて顔の表情などがことばでは表し切れないとでもいうのであろうか。

○言語も顔面の如く平板龐大である。(144)

肝腎のことばづかひも「平板龐大である」というのでは、つまみにくい。

淨瑠璃に細君を連れて行こうとして急に自分の気分が悪くなり、着物でも着換えて待つて居ればよくなると思ひ、

○着物でも着換へて待つて居るが、と口では云つた様なもの、胸中は無限の感慨である。(78)

「無限の感慨」というのは新鮮な表現である。明治期に生まれたい新しい表現といえよう。「無限」というのは哲学上の新しい用語である。それを胸中の思ひを表わすのに用いたのは、斬新な手法である。

「我輩」は人間界の新しい動きである運動や「浴場」にも注目する。石炭を使って風呂を焚くことも、当時の人々にとつては社会的な出来事として注目されたのであろう。

落雲館という私立の中学校の生徒が、主人の家の裏の空地に来て、大声を挙げ、主人をからかうと事件が起き、騒動となる。「吾輩」に言わせれば、これは大事件である。

事件といえは、「主人」の所に泥棒が入り、刑事が来たりする。八木独仙が来たり、寒月や迷亭、その叔父さん、泥棒などと登場人物はさまざまである。日曜日には姪の雪江も顔を出す。主人の教え子古井武右衛門も来る。艶書事件で退校にならないかと心配しての訪問である。その後寒月も虎の鳴き声を聞きに

行こうと誘ひに来る。

迷亭と独仙が碁を打ちに来た時、寒月と東風も訪れる。寒月は結婚の挨拶で、鯉節を三本持つて来たのである。寒月はヴァイオリン弾きの話をする。

ある時は、迷亭が未来の人間の生き方について論じ、個性中心の時代になり、各自が自己の個性を發展させると、親子も夫婦もばらばらになつて生きて行くことになるという。主人、迷亭、独仙、寒月、東風がそろつた所で三平が皆を披露会に招待したいと言ひ、ビールをのむ。やがて皆が帰り、主人も夕飯を済ましひ寝る。吾輩はビールを飲んで酔ひ、甕に落ち、やがて溺れて死ぬ。猫の一生を通して見た人間たちの生き方や姿も幕を閉じる。

猫の一生と共に語られた物語には、語や表現の特徴が豊かに用いられている。

前にも述べたように、新しく使われ出した漢語や表現法がゆたかに指示されている。

本稿には、そのうち特に目立つものをいくつか取りあげて論じた次第である。

注1 (p8) は、「白君」の例がテキストの8ページからの引用であることを示す。

(元本学教授)